

はじめに

私がコンゴ（共和国）にいたときのことである。密かに「コカ・コーラ紛争」と名付けているできごとがあった。80年代後半のことだが、あるとき隣国のザイル（現在のコンゴ民主共和国）から来た子どもたちと、コンゴの子どもたちが激しく言い争っていたのである。原因は「コカ・コーラはどちらの国が作ったものか？」ということで、子どもたちはそのことについて真剣に言い争っていた。「コカ・コーラはキンシャサ（ザイルの首都）で作られて、ブラザビル（コンゴの首都）に運ばれ、そして世界中で飲まれている」と一方が言うと、「いや、コカ・コーラを考えたのはもともとコンゴだ」とお互い一步も譲らない。内容は実にたわいないことであるが、子どもたちの真剣なまなざし、己を信じて疑わない様子、そして仲介に入らなかったら武力紛争にまで発展しかねない様相を呈して、鮮明に覚えているできごとだった。「作ったのは確かアメリカだったと思うけどなあ」と見かねて双方に割って入ると「そのアメリカに持っていったのはどちらが先か？」ということになり、争いが一層激しくなってしまった。

このできごとは、1982年に公開され、日本でも一躍有名になったニカウさんが主人公を演じる『ミラクル・ワールドブッシュマン』という映画を思い出させた。映画では、カラハリ砂漠の上空を飛行していたパイロットがコーラの瓶を投げ捨て、偶然サン人（カラハリ砂漠に住む狩猟採集民）の集落の近くに落下したことから話が始まる。これまで見たことのないガラスの瓶は、彼らにとってはさまざまなことに役に立つ魔法のような道具となった。しかし、一つしかないので集落の中で争いが発生するようになってしまう。平和を愛する主人公は争いの元となるコーラの瓶を誰も二度と手にしないように「地の果て」へ捨てに行く旅に出る。世界中で飲まれているコカ・コーラが、アフリカでこのような形となって影響を与えているのは大変興味深かった。

同じ頃のこと、コンゴの子どもたちのなかで流行っていたものに、正義のヒーローものである『XO』という日本の番組があった。高層ビルから飛び降り背丈以上の扉にジャンプ、必殺のパンチやキックで悪者を負かす姿に子どもたちは釘付けだった。テレビが一般に普及していない頃のこと、放映時間になるとテレビがある家に子どもたちが集まった。大勢で見るとよりエキサイトするのか、番組が終わると住宅街のあちらこちらで、ヒーローになりきった子どもたちが飛んだり跳ねたりしていた。「お前もビルから飛べるのか？」と、子どもたちからよく聞かれたものである。

あれから約30年。現在では子どもたちの多くはコカ・コーラがどの国で最初に作られたものなのか、また「XO」のようなヒーローは実在せず、映像は特殊撮影であることなど知っているだろう。かつては裕福な家庭にしかなかったテレビも、現在では多くの家でアンテナが立てられており、国内はもとより、ヨーロッパや中国、中東などがアフリカに向けた放送も受信できる。携帯電話は、電波が届く範囲が主要都市だけでなく地方の村にも拡大しており、コミュニケーションのスタイルも大きく変容しているようである。コンゴのさまざまなところでグローバル化の影響を確認することができ、社会は絶えず変化している。それはアフリカ全体にも言えることだろう。もともと、

アフリカは奴隷交易や植民地統治など、歴史に登場して以来常に地球規模の渦中に置かれ、翻弄されてきたとも言える。

60年代には多くの独立国家が誕生し「希望の大陸」と呼ばれた。とりわけ1960年は世界的に「アフリカの年」だった。しかし、植民地統治を真似た政策により経済が破綻、汚職が横行し、社会が機能しなくなる。また、独裁政権は反政府分子を徹底的に弾圧し、「絶望の大陸」と呼ばれるようになった。90年代に入ると多くの国が民主化を進めるのだが、その過程で民族の対立が表面化し、それが内戦の原因となる。そして21世紀、内戦の終息とともに、欧米や中東、中国がアフリカに競って投資をするようになり、めざましい経済成長を遂げていく。

アフリカが変容する一方で、われわれのアフリカに対するまなざしはどうだろうか？ ある大学で実施されたアフリカに関する学生への調査によると、「貧困（まずしい）」「紛争」「自然」が上位となる（『アフリカ学入門』（12頁）船田クラーク・サイヤカ篇、明石書店、2013年）。私が講義のなかで行う簡単な調査でも、毎回これと同じような結果がでる。日本におけるアフリカに関する報道が、紛争や難民、また雄大な自然に偏っているからだろうか。しかし、その報道もまた受け手が「期待する」アフリカのイメージ、アフリカのステレオタイプに応えるもので、そのことがまたより一層アフリカのイメージを固定化させていくのかもしれない。「どうして街のきれいなところを撮影しないで、市場の雑踏や砂だらけになって遊んでいる子どもたちを撮ろうとするのか！」コンゴの友人が、日本から来たジャーナリストに憤慨していたが、自分たちの国の偏った現実だけがクローズアップされ、一般化されるのには抵抗があるだろう。

ただ、飢餓や難民の映像は援助を呼びかける際には効果的である。紛争の悲惨な状況は伝えないと国際社会が動かない。野生動物や雄大な自然の写真は、旅行者を呼び込むのに不可欠である。つまり、きれいな街より砂だらけで遊ぶ子どもの姿の方が、われわれの期待に応えるイメージなのだ。そうした点から考えると、コカ・コーラを巡って争い、正義のヒーローの存在を信じる子どもたちの姿は、「素朴である」というアフリカの子どもに対する私自身のイメージと合致していたのかもしれない。

そもそもアフリカには54カ国あり、そのすべてに共通するイメージを提示することは難しい。北は地中海に面したイスラム世界から南は南アフリカのようにサッカーの世界カップが開催できる国がある。その間には、長年無政府状態が続く国もあれば、大虐殺を経てめざましい経済復興を遂げた国もある。砂漠気候と熱帯雨林気候とでは、生活スタイルも大きく違うことは想像に難くない。

本論では、コンゴ共和国を中心に、その社会を通して、また人々の生活を通じて見えてくる諸相を紹介するとともに、その背景にある歴史的なできごとに触れ、時代を通じて常に大きな影響を及ぼしているヨーロッパとの関係、とくに旧宗主国のフランスとの関係に言及していきたい。そして、コンゴとフランスというローカルな枠組みから、アフリカとヨーロッパというよりグローバルな枠組みに視点を転じ、双方が相互に依存してきた関係が概観できればと考えている。